

農 業 技 術 情 報

令和8年7月17日

ゆとりみらい21推進協議会指導部会

十勝普及センター十勝東部支所	015-572-3128
J A 幕別町	0155- 54-4118
J A 札内	56-2131
J A 帯広大正	64-4591
日甜幕別原料事務所	54-2756
幕別町農林課	54-6605

★各作物の生育・作業の遅速（幕別町：7月15日現在）（ ）内は平年値

作物名	遅速 日数	生育および作業状況	生育期節
秋まき小麦	遅 1	稈長 82.3 (81.3) cm 穂長 9.3 (9.1) cm 穂数 641 (658) 本/㎡	成熟期 7/18 (7/17)
馬鈴しょ	早 3	茎長 51.7 (71.6) cm 茎数 4.0 (3.7) 本	終花期 7/16 (7/19)
大 豆	早 1	茎長 56.5 (50.6) cm 葉数 7.9 (7.0) 枚	開花始 7/13 (7/14) 開花期 7/15 (7/16)
小 豆	早 2	茎長 19.0 (15.3) cm 葉数 6.4 (5.8) 枚	
菜豆（金時）	± 0	茎長 41.6 (42.9) cm 葉数 4.0 (4.0) 枚	開花始 7/10 (7/10) 開花期 7/12 (7/12)
てん菜（移植）	早 4	草丈 71.4 (60.3) cm 葉数 24.1 (23.9) 枚 根周 30.3 (27.0) cm	
てん菜（直播）	早 4	草丈 61.5 (51.0) cm 葉数 21.5 (18.1) 枚 根周 20.9 (17.2) cm	
牧 草	早 1	草丈 39.0 (36.9) cm 1 番収穫期 6/17 (6/20) 収穫終 7/6 (7/9)	
飼料用とうもろこし	早 1	草丈 177.8 (168.8) cm 葉数 14.6 (14.4) 枚	
ながいも	早 2	いも長 25.5 (22.2) cm いも重 32.0 (30.6) g いも径 15.2 (15.6) mm	
たまねぎ	早 3	草丈 91.1 (81.4) cm 生葉数 9.7 (9.0) 枚 葉鞘径 22.4 (21.5) mm 球径 4.0 (3.8) cm	球肥大始 7/9 (7/12) 球肥大期 7/12 (7/15)

薬剤使用にあたっては、各部会や販売先等の基準に従ってください。

薬量および倍率は基準内に抑え、薬害やドリフトには十分注意してください。

畑 作

< 秋まき小麦 >

1 収穫後の管理

(1) 麦稈の処理

ア 収穫後の麦稈は速やかに搬出しましょう。

イ 特に、立枯病など土壌病害が発生したほ場では、病気のまん延を防ぐため、麦稈をすき込まずに持ち出し、堆肥化しましょう。また、2～3年は麦の作付けを避けましょう。

- ウ 麦稈をすき込む場合は、窒素流亡による環境負荷を低減するため、窒素肥料の施用を避けましょう。後作に緑肥を栽培する場合には、窒素肥料の施用が必要になりますが、同様に窒素流亡による環境負荷にご留意ください。
- エ そば・麦異品種の後作に麦の作付は避けてください。やむを得ず作付けする場合は、麦稈を搬出しロータリーをかけ、出芽した後に、プラウで埋設して下さい。
- オ ロールベアラで作業する場合は事前に整備点検を行い、作業開始前に駆動部周辺のわらや牧草のくずをきれいに取り除くなど、火災発生防止を心がけてください。

(2) 多年生雑草対策

シバムギ・レッドトップ・ギシギシなど多年生雑草が多い小麦畑が散見されます。多年生雑草対策には耕起前の除草剤茎葉処理が有効です。

【多年生雑草の処理方法（グリホサート系除草剤）】

小麦収穫 → 雑草が 15cm 以上に再生 → 除草剤散布 → 20 日程度放置 → 耕起

※少水量散布時は専用ノズルを使用する。

※通常 2～7 日で効果が発現し、効果完成までさらに日数を要します。

表 1 耕起前の除草剤例（多年生イネ科雑草）

薬剤名	処理方法・使用時期	薬量 (ml/10a)	回数	注意事項
ラウンドアップ マックスロード	耕起前・雑草生育期 水量 25～100ℓ	200～500	3 回	・多年生雑草が 15cm 以上再生後に散布。 ・展着剤を加用しない。 ・散布後 6 時間は降雨がない日に散布。（ラウンドアップマックスロードは 1 時間、タッチダウン iQ は 3 時間） ・周辺作物に飛散しないよう注意するとともにドリフト低減ノズルの使用が望ましい。 ・少水量散布は専用ノズルを使用。
タッチダウン iQ	耕起 3 日以前 (雑草生育期) 水量 25～100ℓ	500～1,000	1 回	
サンダーボルト 007	耕起前 (雑草生育期)	500～1,000	2 回	
クサトリキング	耕起前まで 雑草生育期草丈 30cm まで	250～500	3 回	

(3) 収穫跡地の緑肥作付

地力の維持増進のため、小麦収穫跡地には緑肥作物を作付けしましょう。後作にながいも・ごぼうなどを作付けする場合は、キタネグサレセンチュウ対策のため、えん麦野生種が有効です。えん麦野生種は、ばれいしょのそうか病軽減効果や小豆落葉病の抑制効果もありますが、近年、「えん麦いもち病」による減収が問題になっています。

「えん麦いもち病」は、調査事例から以下の対策が考えられます。

- ・粗大有機物の補給など、収量目的の場合は、えん麦一般種を栽培しましょう。
- ・は種時期を遅らせると発生しにくい傾向がありますが、センチュウ抑制効果を発揮するためには、最低でも 2 ヶ月の生育期間が必要になります。また、多肥を避け、特に地力があるほ場では減肥すると発生しにくくなります。

- ・センチュウ対策が主目的の場合、同様の効果が期待できる「パールミレット（商品名：ネマレット）」の栽培が有効です。

表2 小麦後作緑肥の栽培例（北海道緑肥作物等栽培指針を一部加筆）

緑肥作物名	は種時期	は種量 (kg/10a)	施肥量 (kg/10a)			すき込み時期
			窒素	リン酸	カリ	
えん麦（一般）	8月上～中旬	15～20	4～6	5～10	0～5	10月中旬 ～10月下旬
えん麦野生種 (ハイオーツ、サイヤー)		10～20	5	5	0～5	
シロカラシ類(キカラシ) ※1、2	8月上～下旬	2	5～8	5～10	0～7	
ひまわり(りん蔵)※2	8月上～下旬	1.5～2	4～6	8～10	0～10	
パールミレット	6月上～8月上旬	3～4	6～10	6～10	0～10	

※1・そうか病発生ほ場では前作として用いない。

・根こぶ病発生の恐れがあるので、前作又は後作にアブラナ科野菜の作付けはしない。

※2 キタネコブセンチュウやキタネグサレセンチュウの密度を高めるので、後作物の選定に注意する。

表3 緑肥作物の種類と効果（小麦収穫後の後作緑肥を想定）

作物名		効果												
		有機物の補給	空中窒素の固定	窒素効果	物理性の改善	排水性の改善	生物性の改善						土壌浸食防止効果	養分流亡防止効果
							センチュウ				菌根菌	雑草抑制効果		
							キタネグサレ	キタネコブ	サライネコブ	ダイズシスト				
イネ科	えん麦	◎		○	○		×	◎	×		○	○	○	○
	えん麦野生種	◎		○	○		◎	◎	○		○	○	○	○
マメ科	ハリーベツチ	○	◎	◎			×	×	×	○	◎	◎	○	
アブラ科	シロカラシ	○		○	○		×	×	×				○	○
イネ科	パールミレット	◎			○	○	◎	◎	○		○		○	○

平成16年北海道緑肥作物等栽培利用指針（改訂版）を一部加筆

<ばれいしょ>

1 「疫病」の防除について

高温多湿のため夏疫病の発生しやすい条件になっています。また、塊茎の肥大が始まっていますので、今後は塊茎腐敗など薬剤毎の登録も考慮し、引き続きローテーション防除を行いましょう。

表4 疫病の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用倍率	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	効果の発現	対象病害(倍)		
						夏疫病	菌核病	塊茎腐敗
ホライズンDF	27、11	1,000～2,500倍	14日	4回	予防・治療	1,500	—	—
プロポーズ顆粒水和剤	40、M5	750～1,000倍	7日	5回	予防・治療	1,000	—	750～1,000
エキナイン顆粒水和剤	27、40	2,000～3,000倍	7日	4回	予防・治療	—	—	—
フロンサイドSC	29	1,000～2,000倍	7日	4回	予防	2,000	1,000	1,000
ランマンフロアブル	21	1,000～2,000倍	7日	4回	予防	—	—	1,500
レーバスフロアブル	40	1,500～2,000倍	7日	2回	予防・治療	—	—	1,500

2 「軟腐病」の防除

高温多湿条件で軟腐病が発生しやすい環境にあるため注意しましょう。「6月17日付技術情報」および「令和8年度農作物病害虫防除基準」参照の上、初期防除を徹底しましょう。また、生育量に応じて水量を調節しましょう。

3 「アブラムシ類」「オオニジュウヤホシテントウ」等防除

発生ほ場がみられます。害虫の発生状況に応じて防除を実施して下さい。

* 薬剤の使用例は「6月17日付技術情報」を参照

<豆類>

1 大豆の「べと病」防除

「トヨムスメ」、「音更大袖」、「黒大豆」はべと病抵抗性がないため、特に発生状況に注意し防除を実施してください。その他の品種についても要防除水準に達した場合は防除が必要です。開花始に上位葉を確認し、適正に防除をしましょう。

べと病の要防除水準

開花始の上位葉の病斑面積率2.5%以上（病斑個数30個/葉、葉全体に病斑）

防除時期の目安

開花2～3週間前に要防除水準に達した場合

⇒ 要防除水準に達した時期とその2～3週間後の2回防除。

開花始に要防除水準に達していない場合

⇒ 開花期1回防除が必要（黒大豆）、防除不要（トヨムスメ・音更大袖）

表5 大豆べと病の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
プロポーズ顆粒水和剤	40、M5	1,000	21日	2回

2 大豆の「菌核病」防除

開花始後10～15日目に第1回散布をし、2回目以降は発生状況に応じて10日毎に防除しましょう。

表6 大豆菌核病の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	備考
トップジンM水和剤	1	700～1,000	14日	4回	紫斑病に1000倍で登録あり
プライア水和剤	10,1	1,000	14日	4回	紫斑病・灰色かび病・炭そ病にも登録あり

3 「マメシンクイガ」「カメムシ」の防除(大豆)

1回目防除の目安は、①成虫初発と②莢伸長始(およそ半分の株に2～3cmの莢が認められた日)両方が確認されたら、その6日後頃です。莢伸長始を観察し適期に防除しましょう。2回目防除は1回目の7～10日後に防除します。カメムシとの同時防除が可能です(表7)。

表7 マメシンクイガ・カメムシの防除体系例

回目	目安月日	薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)
1	7月下旬	グレーシア乳剤	3O	3,000	14日	2回
2	8月上旬	マブリックEW	3A	4,000	7日	2回
3	8月中旬	スミチオン乳剤	1B	1,000	21日	4回

※1回目または2回目にピレスロイド系薬剤(RACコード:3A)を散布するのが効果的です。

※甲虫類(コガネムシ等)の食害が目立つ場合は、有機リン剤(スミチオン乳剤)を使用しましょう。

4 小豆・菜豆の病害虫防除

(1)「炭そ病」の防除(小豆・菜豆)

7月からの多雨・多湿時に発病が多くなります。ほ場を良く観察し、発生初期から防除に努めましょう(表8)。 ※「雪手亡」「絹てぼう」は抵抗性があるため防除不要

(2)「菌核病」「灰色かび病」の防除(小豆・菜豆)

開花後に曇雨天が続くと発病しやすくなります。ほ場の生育に合わせて、適期防除に努めてください。

- ◎ 小豆防除適期 1回目:開花始後7～10日目 2回目:1回目防除の10日後
- ◎ 菜豆防除適期 1回目:開花始後5～7日目 2回目:1回目防除の10日後

表8 小豆・菜豆「菌核病」「灰色かび病」を中心とした防除例

回数	薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)	炭そ病
1回目	ミギワ10フロアブル	52	1,000	7日	3回	○
2回目	パレード20フロアブル	7	2000～4000	前日	3回	×
3回目	ファンタジスタ顆粒水和剤	11	2,000	7日	3回	○

※菜豆類は病害の発生が多い場合、3回目を検討する

(3)「アブラムシ類」「アズキノメイガ」「ダニ」防除(小豆)

発生状況に応じて防除してください。アズキノメイガは開花始の7～10日後に薬剤散布を行ってください。

表9 小豆の「アブラムシ類」「アズキノメイガ」「ダニ」防除薬剤例

薬剤名	RAC コード	使用濃度（倍）	使用時期 （収穫前）	使用回数 （以内）	アブラ ムシ類	アズキノ メイガ	ナミハ ダニ	カメ ムシ
グレーシア乳剤	30	2,000～3,000	14日	2回		○	○	
モスピランSL液剤	4A	2,000～4,000	14日	3回	○	○ 2,000倍		
マブリックEW	3A	4,000	7日	2回	○	○		
ゲットアウトWDG	3A	3,000	7日	3回	○	○		
ペイオフME液剤	3A	2,000	7日	3回	○	○		
スミチオン乳剤	1B	1,000	21日	4回	○	○	○	○
トクチオン乳剤	1B	1,000	30日	2回		○	○	
カスケード乳剤	15	4,000	7日	2回		○	○	
フェニックス顆粒水和剤	28	2,000～6,000	7日	2回		○		

※「アドマイヤー顆粒水和剤」は豆類（種実）での登録が削除となりましたのでご注意ください（大豆・菜豆含む）。

<てんさい>

褐斑病の初発およびヨトウガの食害が確認されています。ほ場を良く観察し適期防除に努めてください。また根腐病・葉腐病も発生しやすい気象条件となっています。

1 「褐斑病」の防除

積算気温が高く褐斑病の多発しやすい天候が続いておりますので、以下の薬剤を参考に水量は120リットル/10a で散布してください。

表10 褐斑病防除例

防除時期	薬剤名	RAC コード	使用濃度 （倍）	使用時期 （収穫前）	回数 （以内）
7月27～ 29日頃	ムケツDX	M3 11A	800	21日	3回

2 「葉腐病（根腐病）」の防除

葉腐病は高温多湿条件で多発します。発生が見られたら直ちに防除を行ってください。根腐病も同じ病原菌ですので、発生に注意しましょう。

表11 葉腐病の防除薬剤例

防除時期	薬剤名	RAC コード	使用濃度（倍）	使用時期 （収穫前）	回数 （以内）
7月27～ 29日頃	フリントフロアブル25	11	1,500	21日	3回

野 菜

< ながいも >

(1)分肥

分肥を行う場合は、7月下旬までに実施してください。また、過剰な分肥や多肥ほ場における分肥は、黄変期の遅れによる乾物率低下の原因になるため、適正範囲内で実施してください。

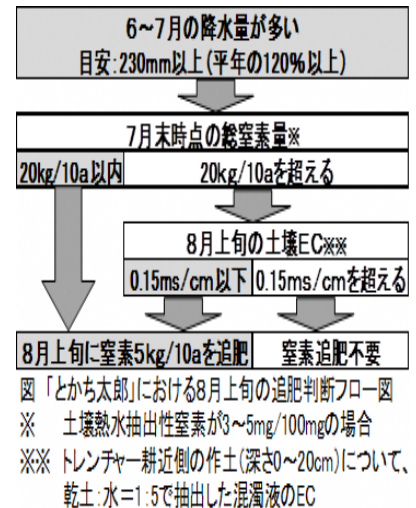
(2)とかち太郎の追肥判断(令和4年度指導参考)

とかち太郎は、いもの肥大が収穫まで継続し多雨条件において、尻割れが発生しやすいことから以下の基準を追肥の参考としてください。

追肥実施の目安は6～7月の降水量が230mm以上かつ7月末までの総窒素施肥量20kg/10a以内のとき8月上旬までに5kg/10a程度で実施してください。

また、20kg/10aを超えている場合でも8月上旬に土壌診断(EC)を測定し、EC: 0.15mS/cm以下であれば8月上旬に窒素5kg/10a程度を追肥します。

6月1日～7月15日現在における積算降水量は139.5mm(糠内アメダス)となっており、追肥を実施する降水量には至っていません。



< たまねぎ >

(1)病害虫防除

①ネギアザミウマ

高温乾燥条件で急激に密度が上昇するので注意してください。また、小麦の収穫に伴い近隣ほ場へのアザミウマ類の侵入が懸念されます。小麦収穫前後に防除を実施してください。

②白斑葉枯病・軟腐病・べと病

白斑葉枯病はまとまった降雨の後、7日以内の温暖な日に初発となりやすく、平均気温18℃以上で発病する可能性が高くなります。

また高温(25℃以上)多湿条件や軟弱徒長気味の生育で、軟腐病の発生が懸念されます。降雨や虫の食害などで、傷ついたところから軟腐病が感染しやすくなります。

べと病は気温が15℃前後の低温多湿状態で発生しやすく、降雨が続くと二次感染を繰り返し、多発しやすくなります。

高温多湿下での銅剤による防除は薬害が心配されますので、以下の点に注意してください。

【銅を含む薬剤を使用する際の注意点】

- ・高温多湿条件や軟弱徒長気味に生育している場合は、薬害発生の恐れが高まります。
- ・散布後に降雨が見込まれる時や朝露が残っている時間帯の散布は薬害発生につながる恐れがあります。
- ・薬害軽減対策として、クレフノンを加用してください。

(2)根切り作業

倒伏後は適期根切りにより品質向上を図ってください。根切りの目的は、変形、裂皮、皮ムケ防止や均一な枯葉、着色促進による品質向上です。適期に根切りを行い品質低下を防ぎましょう。

また、日焼け球が発生しやすくなるため高温時の根切り作業は控えてください。

～農薬の安全使用と農作業事故防止～

- ★農薬散布において「農薬の安全使用基準」を遵守し、散布の高さを調整し周辺作物への飛散防止に努めましょう。
- ★農薬散布時は必ず防除用マスクを身に付け、肌をしっかり覆うようにしましょう。
また、散布が終わったら肌の露出部を良く洗い、うがいをしましょう。
- ★トラクタ発進・PTO 始動時は、クラクションなどを鳴らし周囲に合図しましょう。
- ★機械の調整・整備時(つまり物除去等)は必ずエンジンを止めましょう。
- ★作業機の連結時での「挟まれ」事故や「機械昇降時の落下」事故に十分注意しましょう。
- ★機械の飛び降り・飛び乗りをしないようにしましょう。
- ★夕方や夜間に公道を走行する時は、車幅灯を取り付けましょう。
- ★早めの合図、低速車マーク・反射シールをはるなどトラクタの位置や作業機の大きさを知らせるようにしましょう。
- ★水分と塩分をしっかりととり、熱中症に注意しましょう。